

第3部 優秀作品賞・毎日新聞社賞



206 坂本章 掛分組浅鉢 大)11×55.5 小)6×24



鳥取民藝協会会員  
日本陶芸展入選4回  
日本民藝館展日本民藝館賞・奨励賞

实用陶器でもなるべくやぼったくならず、軽快にモダンな器を心掛けています。

受賞作品もその一連の仕事で、奇をねらわず用に即した美しい器を心掛け、因州・中井窯の原料から精製した伝統の青黒釉を用いて、この窯ならではの器を目指しました。

従来からの掛分の仕事に、縁の内側に緑釉の線を掛けることで、器体をより締まった印象に仕上げました。

優秀作品賞・毎日新聞社賞

坂本章 掛分組浅鉢

水尾比呂志

第18回日本陶芸展第3部の賞は、坂本章の「掛分組浅鉢」(大1・小6)が獲得した。賞選定の経緯を記すと、この部への応募作192点から入選した34点のうち、第3部審査員4名(黒川雅之・長谷部満彦・水尾比呂志・山下和正)が、賞の候補作として、坂本章「掛分組浅鉢」、福間瑠士「スリップ文様長角組皿」、阿部眞士「白磁口紅組皿」、岩瀬健一「柿磁掛分組鉢」、六平「片垂れ組鉢」の5点を推薦し、第1部・第2部の賞候補19点及び招待作品26点と合わせた50点を、全審査員17名の投票(各5票持ち)によって、大賞と準大賞を選んだ。坂本「掛分組浅鉢」は、大賞・準大賞に次ぐ第3位であった。なお同人は、「染分対三色大鉢」と「白釉組深皿」も出品、前者が入選している。

同人の出品作品はいずれも優れた出来栄を示すが、とりわけ受賞作の強い造形美は、大賞・準大賞作品に堂々と対抗し得る雄作と言ってよい。大鉢は高11cm、径55.5cm、小鉢は高6cm、径24cm、それらの器形は機能的な安定感に富み、益子の柿釉に土灰を加えた黒釉と、銅に薬灰を配合した青釉の、深々とした釉色は目覚ましいばかりだ。この2種の釉薬は発色の温度を異にするため、調節の利きやすい灯油窯で焼成したとのことだが、みごとな呈色は作者にとっても快心のものであったろう。

坂本章は、1965(昭和40)年、鳥取市郊外河原町中井の窯場に生まれ、高校卒業後、父實男のもとで陶技を修めた。現在は中井窯を担って、伝統の黒釉・青釉・白釉を活用する現代食器造りを主に励んでいる。これらの3色を使い分け、また組み合わせた各種の器種は、和洋の食卓に使いやすい形と機能を備え、日本陶芸展にも度々応募、入選して、現代民陶作者の中堅に位置する。黒青掛分の意匠は、山陰民藝運動の指導者で鳥取民藝美術館設立者の故吉田璋也が創案したもので、同地近くの牛ノ戸窯で多年製産さ

れてきたのだが、同窯が衰えた現在では、中井窯の坂本父子に引き継がれて特産となっている。天目茶碗に抹茶の緑がこよなく調和するように、皿や鉢などのさまざまな器体に掛け分けられた黒と青の対比は、穏やかで清新である。当初は青に生まな感じの難があったが、今は深みに安定して、受賞作のような魅力的な釉調に成熟した。黒青の掛け分けのほかに、それぞれを単独に掛けた器も焼く。白釉を加えた三色掛分の意匠は、坂本章の工夫であって、2001(平成13)年度の日本民藝館展で大賞を得た。「染分対三色大鉢」は今回も出品して入選しているが、黒青釉を器底と縁に掛け分けた受賞作により強く新しい成果が認められた。この組皿の縁の上辺の黒に青をさりげなく廻らした作意は秀逸である。

賞候補に推された他の4者の作も、それぞれが実用陶器として賞用したい器物である。阿部眞士の「白磁口紅組皿」は、本展や日本民藝館展の常連練達の作物、清らかな白磁の完璧な器体を慎ましく縁どる口紅が愛着を呼ぶ。福間瑠士の「スリップ文様長角組皿」は、英国伝統のスリップ装飾方を摂取して、器の全面的縞模様を転生させた。料理店でも家庭でも現代風な料理の食味を増さしめるであろう器群だ。岩瀬健一の「柿磁掛分組鉢」も、器形の機能性と釉色の美しさで現代食器としてまことに好ましい。六平の「片垂れ組鉢」は、肥前磁器の伝統技術の健在を示す軽快な器形と白釉の洗練美を満喫させる実用器である。

毎回の第3部出品の器は、一部分を除いて、用の美を堪能させる作物に溢れていて、審査の眼と心を楽しませ和ませてくれるのだが、実用器種の多種多様さを思えば、組物に集中し過ぎてきている嫌いが、今回もあった。より豊富な種類の用器の出品を望みたい。